

長野県松本市
MUKAIHARA

向原遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1998.3

松本市教育委員会

長野県松本市
MUKAIHARA

向原遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1998.3

松本市教育委員会



帯飾り (鉦尾：第5号住居址)



表

裏



墨書土器



第19号土坑出土遺物一括



調査区全景（東から）

序

向原遺跡のある寿田町は、松本市南東部に位置し、古くは芳川地区に属していましたが、平成7年10月30日の第12次住居表示の実施により現在は寿地区となっています。この地区は、弥生時代中期終末期の標式遺跡である百瀬遺跡をはじめとして多くの遺跡のある地域です。向原遺跡もそうした遺跡の一つとして知られていました。このたびこの場所に長野県松本障害者雇用支援センターが建設されることになり、埋蔵文化財の保護を図るために松本市が社団法人長野県雇用開発協会から委託を受け、松本市教育委員会が向原遺跡の第1次調査として緊急発掘調査を実施したものです。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成9年7月から8月にかけて行われました。作業は梅雨時期から夏期におよびましたが、参加者の皆様のご尽力により無事終了することができました。その結果、平安時代の竪穴住居址8棟といった遺構を発見し、また同時代の貴重な遺物も多数得ることができました。これらは、今後地域の歴史解明に大変役立つ資料になることと思われま

す。しかしながら建物建設に先立って行われる発掘調査には、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾の中で、文化財保護に携わるもの苦悩は絶えません。本書を通じて貴重な文化財の保護とその施策へのご理解を深めていただければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、過酷な状況の中発掘調査にご協力いただいた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大なご理解とご協力をいただいた社団法人長野県雇用開発協会の皆様、そして地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

例 言

- 1 本書は、平成9年7月17日から平成9年8月16日にかけておこなわれた、松本市寿北7丁目1番に所在する向原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は社団法人長野県雇用開発協会が長野県松本障害者雇用支援センターを建設するのに伴って松本市教育委員会がおこなったものである。
- 3 本書の執筆分担は次の通りである。
第1章：事務局
第2章第1節：太田守夫
第3章第3節1：竹内端長、澤柳秀利、荒木 龍
上記以外：澤柳秀利
- 4 本書の作成・編集にあたっての作業分担は次の通りである。
遺物洗浄接合：五十嵐刷子、内澤紀代子、百瀬二三子
土器・陶器・石製品実測：竹平悦子、松尾明恵、三宅康司、村松恵美子、横山真理
土器・陶器トレース：竹平悦子、松尾明恵、三宅康司、村松恵美子、横山真理
石製品トレース：太田圭郁
鉄器・鉄製品保存処理：内田和子、洞澤文江
鉄器・鉄製品実測：洞澤文江
鉄器・鉄製品トレース：洞澤文江
遺構図調整・整理：石合英子
遺構図トレース：開嶋八重子
図版組み：石合英子、澤柳秀利
写真撮影：澤柳秀利、荒木 龍（遺構・現場）、宮嶋洋一（遺物）
総括・編集：澤柳秀利
- 5 本書の中で使用した遺構名の呼称は次の通りである。
第1号住居址→1住 第1号土坑→1土 第1号ピット→P1
- 6 本遺跡の調査及び本書の執筆・作成にあたって次の方々のご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
桐原 健、佐々木明、樋口昇一、森 義直
- 7 本調査の出土遺物及び現場で作成した測量図、写真等の諸記録は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館に収蔵されている。（松本市立考古博物館 〒390-0823 長野県松本市大字中山3738番地1 Tel0263-86-4710）

目 次

序
例言
目次

第1章	調査の経緯	3
	1. 調査に至る経過	3
	2. 調査体制	3
第2章	遺跡の環境	4
	第1節 遺跡の立地と地形・地質	4
	第2節 歴史的環境	6
第3章	調査結果	10
	第1節 調査の概要	12
	第2節 遺構	12
	1. 住居址	12
	2. 土坑	14
	3. ビット	15
	第3節 遺物	17
	1. 土器・陶磁器	17
	2. 石製品	19
	3. 鉄器・鉄製品	20
第4章	調査のまとめ	23

図版目次

第1図	向原遺跡I土層柱状図(西側) ……	5
第2図	遺跡の位置と周辺遺跡 ……	7
第3図	調査地位置図 ……	8
第4図	調査範囲図 ……	9
第5図	遺構配置図 ……	11
第6図	第1～3号、第8号住居址 ……	25
第7図	第4～7号住居址 ……	26
第8図	土坑 ……	27
第9図	土器実測図(1) ……	28
第10図	土器実測図(2) ……	29
第11図	土器実測図(3) ……	30
第12図	土器実測図(4) ……	31
第13図	土器実測図(5) ……	32
第14図	鉄器・石製品実測図 ……	33

表目次

第1表	住居址一覧表 ……	16
第2表	土坑一覧表 ……	16
第3表	松本平における土器編年 ……	17
第4表	向原遺跡黒書土器一覧 ……	19
第5表	向原遺跡金属製品一覧 ……	20
第6表	向原遺跡出土土器一覧 ……	21

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

平成8年8月30日	予定地内の一部について試掘調査を実施。この結果を踏まえ、既存建物解体終了後再度試掘調査を行うこととした。
平成9年7月13～14日	再度試掘調査を実施。住居址など埋蔵文化財を確認。
7月16日	㈲長野県雇用開発協会と保護協議。建物建設部分について埋蔵文化財発掘調査を行い、記録保存を行うこととした。
	7月17日付けで㈲長野県雇用開発協会と松本市との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
7月17日	発掘調査開始

2 調査体制

(1) 調査団

調査団長 守屋立秋(松本市教育長)

調査担当者 澤柳秀利、今村 克、荒木 龍(松本市立考古博物館)

調査員 太田守夫、太田圭郁、佐々木明、松尾明恵、宮島洋一

協力者 浅井信興、浅輪敬二、石井脩二、上兼昭一、大月八十喜、上條道代、神田栄次、高橋登喜男、寺島 実、中村恵子、中村安雄、畑 茂、林 武佐、藤本利子、前澤保亀、丸山喜和子、三代沢二三恵、甕 國成、百瀬二三子

(2) 事務局(平成9年度)

松本市教育委員会 木下雅文(文化課長)、熊谷康治(文化課長補佐)

村田正幸(文化財担当係長)、近藤 潔、田多井用章、川上真澄

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地形・地質

1 位置と地形

本遺跡は松本市南部、北流する田川右岸沿いの、旧芳川平田向原地籍(標高608m)に位置する。現在の新町名は寿北7丁目、それまで寿田町と呼ばれていた新興の市街地に当たる。田川平田橋を東へ50m行ったすぐの道路端北側、県施設の敷地内を発掘している。既報の松本市文化財調査報告No.39竹淵・南原遺跡(本遺跡との距離北へ700m・900m)、同報告No.124 竹淵遺跡Ⅱ(同400m)、同報告No.108百瀬遺跡Ⅱ(同南へ1075m)と地形・地質・災害にわたり立地条件に共通点が多い。すなわち地形上、田川の右岸の沖積地と、牛伏川扇状地の末端にのっている(牛伏川については前記の報告書参照)。前記の遺跡を含む寿地区の田川右岸には、牛伏川扇状地の末端を侵食して出来たと考えられる段丘地形が、南から北へ(赤木・小池・百瀬・竹淵)続いているのが見られる。部分的には牛伏川の大氾濫の跡を示すように、段丘地形が覆われているところもある。そのなかにあって本遺跡周辺は田川の河床(平均傾斜0.5°)と牛伏川扇状地末端(平均傾斜北西へ1.6°)が最も近接したところで、両者からの洪水・氾濫・災害の常習地であった。牛伏川の氾濫は、江戸時代以降だけでも十数回を記録し、中でも明治29年(1896)7月の大氾濫は、小池、白川、百瀬の田畑を流し、田川を破り対岸の平田、出川更に下流へ大きな影響を及ぼしている。

ところで、本遺跡周辺は昭和36年(1961)頃から次第に住宅地化し、今日の豊丘団地(寿田町・豊町)を形成するようになったため、それまで田川の河川敷と牛伏川扇状地表面上の畑地であった景観を一変させてしまった。現在は、過去の考察や昭和35年発行の二万五千分の一地形図松本(地理調査所～現在の国土地理院)による考察、及び発掘による地層の観察によるしかない。

当時、田川は極めて部分的な堤防の備えしかなく、遺跡付近になると、河床の高さは兩岸とほとんど平衡の状態であった。また水量は極めて少なく、この辺りは、洪水期以外は流水を見なかった。河川敷には柳、のちにニセアカシアなどの樹木が生え、扇状面は桑畑などに利用されていた。それが、住宅地形成とともに始まった河川改修による高い堤防と天井川の出現(兩岸と堤防の高さの差がおよそ2m)によって状態が大きく変わっている。

2 地層の堆積

竹淵遺跡など前記の遺跡を含む牛伏川扇状地末端は、段丘崖(線)・末端湧水など地形的にはほとんど共通している。しかし地層の堆積は、前記の遺跡や本遺跡で見られるように必ずしも一様ではない。一般的には上層から、1)牛伏川の洪水・氾濫性の堆積物～砂礫混じり灰褐色・褐色土層。2)砂層～細砂・粗砂・中細礫混じり層・互層。3)褐色～黒褐色粘質土層(湿性・腐植質・細礫を含むことがある)が観察される。これらは氾濫の規模や、その時の扇状地末端の地形により、各堆積物の厚さや範囲が違ってくる。例えば竹淵遺跡のように、末端が並柳低湿地の延長と思われるような低湿地に近接していたり、百瀬遺跡のように、段丘面・崖・崖下にわたっていて、堆積状況に違いがある。ただいずれも崖下に湧水があり、湿地性の堆積層をとまうことは共通している。

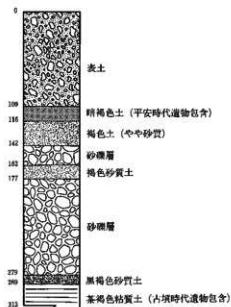
本遺跡の、地層の堆積状況は第1図の基本土層図に示すように、上層から1)表土を含む埋め立て土(攪乱)100cm。2)礫混じり土・礫混じり砂質土・砂礫層の互層～上から①暗褐色土20cm、②やや砂質の褐色土20cm、③砂礫層30cm、④褐色砂質土20cm。3)砂礫層100cm。4)黒褐色砂質土10cm。5)茶褐色粘質土30cm

(+) からなっている。このうち①は平安時代の住宅址・遺物の包含層であり、5) は古墳時代の遺物を出土している。特に砂礫層の発達は明瞭で、上層と下層からなり、少なくとも2回の氾濫が認められる。含まれる砂礫はいずれも牛伏川系統の岩石(石英閃緑岩・ひん岩・ひん岩のホルンフェルス)で、3) 以上の堆積は牛伏川の氾濫と考えられる。地層中に見られる礫は、径10cm前後の大・中礫の亜角礫を中心とし、土・砂・砂礫混じりとなり、時々30×20cmほどの巨礫を含んでいる。また平安時代遺物の包含層の暗褐色砂質土を覆う黒褐色砂質土は、下部の4) 黒褐色砂質土と対照的で、それぞれ生活面が推定される。このような堆積状況は、前記の遺跡の中で、百瀬遺跡第三次発掘の3号址(昭和27年5月)の地形に似ていて関心を引く。

3 地形の形成と遺跡

以上の堆積や遺跡・遺物の出土状況から、調査地の地形の形成は、次の順序で行われたと考えられる。

- 1) 田川の浸食による段丘の形成。
- 2) 田川の沖積層の堆積と、牛伏川扇状地末端の湧水による低湿地の成長～基底の茶褐色粘質土層。
- 3) 基底の茶褐色粘質土、黒褐色砂質土～古墳時代の生活面・遺物
- 4) 砂礫層の堆積(下部)～牛伏川の氾濫
- 5) 褐色砂質土層の堆積
- 6) 砂礫層の堆積(上部)～牛伏川の氾濫
- 7) 褐色砂質土、暗褐色砂質土、黒褐色砂質土の堆積～平安時代の生活面・遺物
- 8) 牛伏川のさかんな氾濫と田川河床の上昇
- 9) 護岸工事による堤防・天井川の出現と埋め立てによる地形の変化(都市化・宅地化)



第1図 向原遺跡Ⅰ土層柱状断面(西側)

第2節 歴史的環境

寿田町は、現在の行政区画では寿北7丁目で寿地区となっているが、元来は芳川地区に属していたところ、両地区にまたがる地域であるといえる。

前節でも述べた通り、この地区の歴史を語る上で欠くことのない要素として牛伏川と田川の両河川がある。特に牛伏川は、古来より知られる暴れ川で、近代まで氾濫を繰り返してきている。縄文時代の遺跡は、この周辺に白川、野田遺跡などでも調査が行われているが、牛伏川の厚い砂礫に阻まれて、集落の全貌は明らかにされていない。弥生時代になると、今回調査地の北500mの竹淵遺跡、南1kmの百瀬遺跡において、中期～後期の集落跡が確認されている。向原遺跡においても、弥生時代の遺物が採集されているようであり、田川右岸流域沿いに点在する弥生時代集落の一つであったのだろう。今回の調査では、その痕跡は確認されていない。

古墳時代については、向原遺跡は該期の遺跡としては周知されていない。後述するが、平安時代面の下150～200cm下より確認された古墳時代の遺物包含層は、この周囲に該期の集落が存在していたことを示す明確な資料だといえる。牛伏川の砂礫層の下には古墳時代の面が広がっていると思われる。田川を挟んだ左岸の平田北遺跡では、古墳時代の掘立柱建物址も確認され、さらにその北には平田里古墳群、出川南遺跡と古墳時代の遺跡が続いている。また、南の百瀬集落には、詳細こそ不明ながらも、遺物出土の伝承を持つ耳塚古墳がある。

奈良・平安時代の向原は、牛伏川の砂礫層の上に広がる集落である。時期についても、現在まで不明とされていたが、今回の調査によって9世紀前半から始まり、9世紀後半を中心とし、それと11世紀後半という三つの画期を持つ集落であることが判明した。この時期、特に9世紀後半は、周辺においても集落数（発掘数）も増加し、小池遺跡（南2.5km）では大規模な集落が発達し、70軒を超える住居址の他、役所あるいは有力者の館と思われる大型掘立柱建物址も検出されている。比較的近い百瀬遺跡でも、弥生時代の住居址のみではなく、同一面から、平安時代に属する住居址も数多く検出され、集落が存在していたことが確認されている。10～11世紀は、向原を含めこの周辺での住居址数は減少する。これに対し、田川左岸芳川地区の平田本郷、小原遺跡等では、この時期から中世にかけて集落が大きく発展をし、小原遺跡では緑釉陶器等の高級陶磁器もみられ、有力な集落であったことが推察されている。向原遺跡では、こうした中世へのつながりはみられず、周辺の該当集落の状況と同様に、発展、消滅していったのだろう。

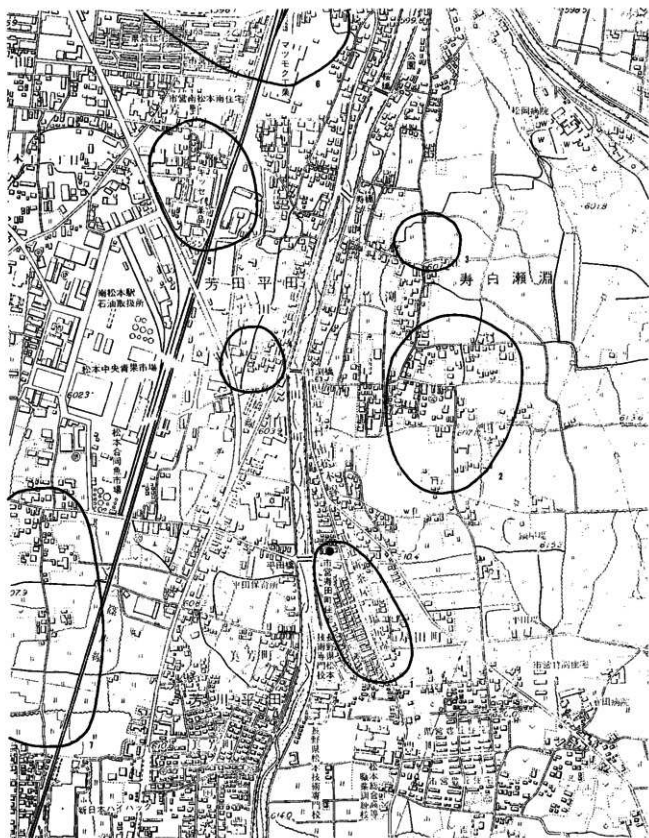
中世以降の向原の様子は不明である。度々触れている、向原遺跡を挟む竹淵、百瀬の両遺跡では、中世の痕跡を残している。竹淵遺跡（第2次）では、建物址と思われるピット群、百瀬遺跡（第2次）では渡米銭、山茶碗を伴う土坑（墓跡）が検出されている。向原遺跡の付近は、恐らくは牛伏川の度重なる氾濫流路によって、人の住めない地に帰ってしまったのではないだろうか。

近世になると、この地は平田村に属する。ただし村内の3集落（本郷、茶屋、新茶屋）はいずれも田川左岸であり、向原周辺は村中心部とは田川で隔たれ、北は竹淵村、南は百瀬村に囲まれた、いわば平田村の中心部から見ると、田川を挟んだ向いの原なのだろうか。

平成7年10月30日、第12次住居表示の実施により、この周辺は寿北7丁目となり、寿地区になった。

参考文献

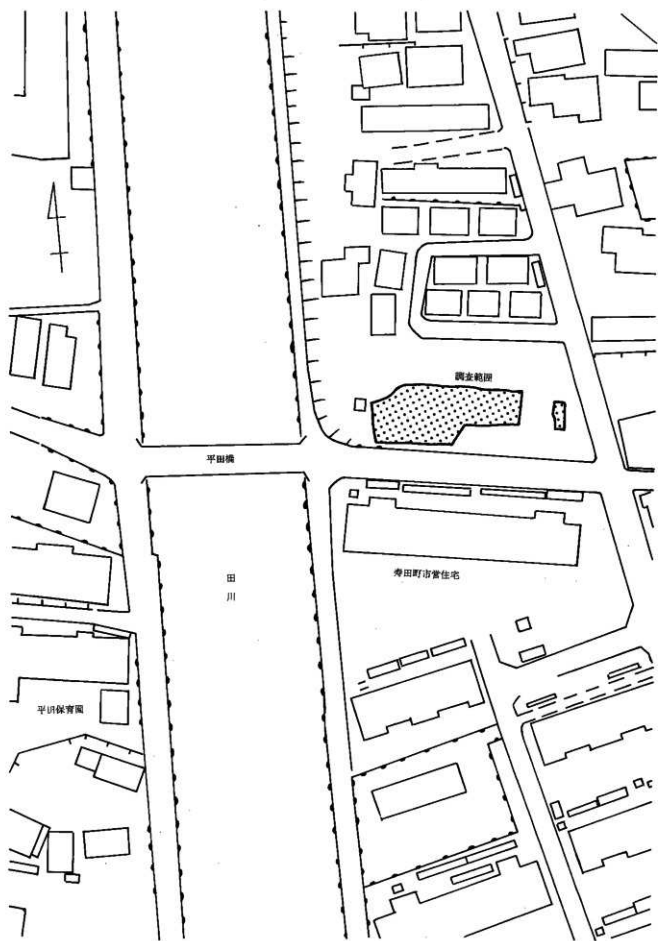
- 1：松本市 1993『松本市史 一第四巻 旧市町村編田一』



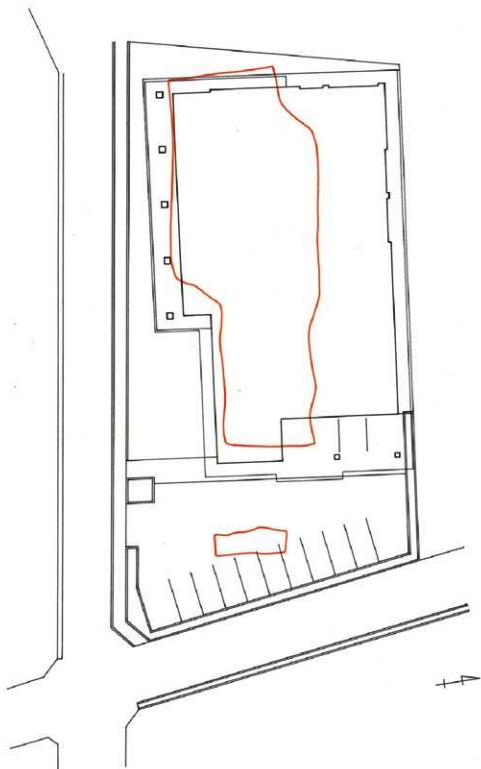
- : 今回調査地点
- | | |
|----------|------------|
| 1 : 尚原遺跡 | 5 : 平田北遺跡 |
| 2 : 竹園遺跡 | 6 : 引川南遺跡 |
| 3 : 尚原遺跡 | 7 : 平田本郷遺跡 |
| 4 : 平田遺跡 | |

S=1:10000

第2図 遺跡の位置と周辺遺跡



第3図 調査地位位置図



第 4 图 調査範囲图

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

1 調査地

今回の調査地は松本市寿北7丁目1番37号の、長野県松本技術専門校寄宿舎跡地である。向原遺跡は、現在まで発掘調査はおこなわれておらず、今回が初めての調査となる。長野県松本障害者雇用支援センターの対象面積は1,815㎡であるが、調査区域については、試掘調査の結果遺構、遺物の存在が確認された部分のうち、建物の建設にかかる部分の490㎡とした。

2 調査方法

調査にあたっては、重機を使用して整地層を除去している。調査区の南西に任意の基準点を設け、磁北を基軸として調査区内に3mの方眼を設定し、測量を行った。また、平安時代の面的調査終了後に、重機によって深掘りトレンチを2ヶ所設定して平安時代以前の遺構、遺物の確認を試みた。なお、遺構配置図(第5図)のN、S、E、Wは方位を表し、数字は基準点からの距離を示している。遺構番号は、本調査が第1次調査となるため全てNo.1からはじまる。

3 遺構

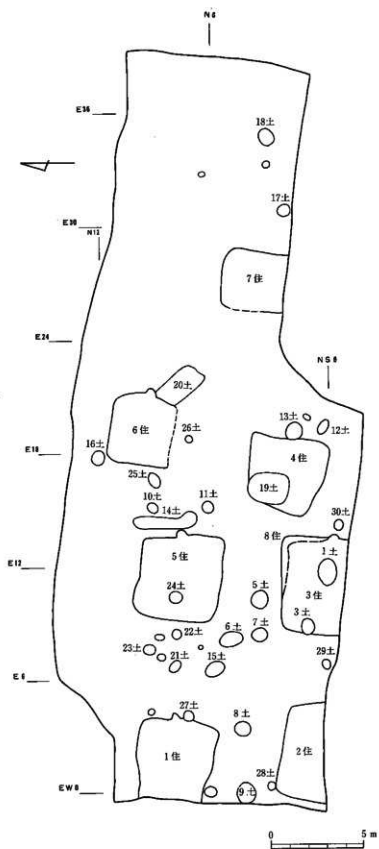
住居址8軒、土坑28基、ピット9個

住居址を含むほとんどの遺構が平安時代前期に属すると考えられるが、若干時代を下る土坑墓も確認されている。ピットは、掘立柱建物址を構成するものとは考えにくいものである。また、これは遺構ではないが平安時代の生活面の150~200cm下から、古墳時代の遺物包含層が確認され、遺物も出土していることから、従来考えられていた向原遺跡の時期(弥生・奈良~平安)のみではなく、古墳時代の遺構も比較的近い範囲に存在することが考えられる。

4 遺物

平安時代の土器・石製品(鉈尾)・鉄製品(刀子、牽引き具等)、古墳時代の土器

平安時代の遺物の大半は、住居址から出土した。特に文字資料として墨書土器は14点と多く出土し、文字が判読できるものも少なくない。また、墨書土器とともに、円面硯、鉈尾も出土した住居址があり、役人などの職字層の存在を示唆するものであろう。



第 5 図 向原遺跡遺構配置圖

第2節 遺構

1 住居址

今回の調査では、8軒の住居址を検出した。調査区が全体的に攪乱を受けていた割には遺構の残りは良好で、また遺物もよく残存していた。全ての住居址について、その時期を特定することができた。ここでは、検出された住居址について述べていきたい。

第1号住居址(第6図)

調査区西端部で検出した。他遺構との切り合い関係は、27土に切られる。西側の一部が調査区外にかかるため全体の規模は不明であるが、東西(337cm)×南北490cmで、床面積は15.1㎡を測る。平面形は隅丸長方形を呈していたと考える。主軸方向はN-99°-Eを示す。壁は比較的遺存状況がよく、平均で44cmを測り、やや緩やかに立ちあがる。覆土は2層に分かれ、上層は黒褐色砂質土で小礫を多く含む。下層は暗褐色砂質土である。床は砂礫混じりの暗褐色土でややしまっている。ピットは6個確認したが、いずれからも柱痕は検出されず、柱穴と判断するのは難しいが、位置から判断してP₁、P₂は主柱穴の可能性はある。カマドは東壁中央より検出されたが、残存状況は良好ではない。焼土はカマド内一面で確認された。なお、川原石が多くみられたが、被熱したものはなく、袖石等ではなく、カマドを壊した際に投げ込んだものとする。煙道は一部残存する。遺物は、激しく攪乱を受けていた割には多くの出土がみられ、黒色土器Aの杯、椀等図化できるものだけで21点を数える。鉄製品は、釘2点(鉄-5、鉄-6)の出土がみられた。遺物から判断して、本址の時期は平安時代前期(9世紀末)に属すると考える。

第2号住居址(第6図)

調査区南西部で検出した。他遺構との切り合い関係はないが、一旦床面と判断した面の更に下層から、夥しい量の遺物が確認され、また床面も確認されたことから、本址は建替えなどによって重複する2軒の住居址である可能性がある。南側の一部が調査区外にかかるため全体の規模及び平面形は不明である。残存部分は東西536cm×南北(248cm)である。主軸方向は、N-15°-Eを示すと考える。壁は遺存状況がよく、下層面の平均で65cmを測り、ほぼ直に立ち上る。覆土は2層に分かれ、上層は暗褐色砂質土で下層は褐色砂質土である。床面は、上層面は褐色砂質土で軟弱である。下層面は砂礫混じりの茶褐色土でややしまっている。ピットは上層面で2個確認できたが、下層面からは確認できなかった。上層のピットからはいずれも柱痕は検出されず、柱穴と判断するのは難しい。上層の床面からは焼土の広がりか1ヵ所確認されたが、用途は不明である。カマドは調査区外であろうか、検出することはできなかった。遺物は、下層の床面を中心に多くみられた。出土量も多く、土器では図化できるものだけで24点を数える。黒色土器Aの杯A、軟質須器の杯Aを中心とし、文字資料として墨書土器が2点みられ、内1点(30)は「良」と明瞭に読み取れる。鉄製品は、刀子が1点(鉄-1)、芋引き具(鉄-7)が1点出土している。以上のことより判断して本址の時期は、上層、下層ともに平安時代前期(9世紀後半)に属すると考え、建替えが行われたとしても、かなり近い時期の中で行われたものであろう。今回の調査では1軒の住居址として扱った。

第3号住居址(第6図)

調査区の南部で検出した。他遺構との切り合い関係は、8住に貼られ、1土、3土に切られる。南側の一部が調査区外にかかるため全体の規模及び平面形は不明である。残存部分は東西524cm×南北(320cm)である。主軸方向はN-96°-Eを示す。壁は平均が28cm程度で緩やかに立ち上る。覆土は2層に分かれ、上層の、礫を多く含む黒褐色土は本址を貼る8住の覆土で、下層の暗褐色砂質土が本址の覆土と考える。床面は礫混じりの褐色土で、ややしまっている。ピットは5個確認したが、いずれからも柱痕は検出されないため、柱穴と判断するのは難しいが、位置から判断して、P₂は主柱穴の可能性はある。カマドは東壁中央より検出

された。遺存状況は良好ではないが、焼土はカマド内一面でみられ、被熱した川原石もいくつかあることから、石組みカマドと考える。煙道も残存し、よく被熱をしている。なお直ぐ東にある30土は、本址の煙出しピットの可能性がある。遺物については、8住のところでも述べるが、上層から出土したものは、本址を貼る8住に属するものと考え。本址に属する遺物は、下層から出土したもので、黒色土器の杯Aを中心に、図化できるものだけで25点を数える。文字資料として墨書土器が本址からは5点みられ、本遺跡の中では最も多く出土している。明瞭に文字の読み取れるものとしては「田」(48)、「真」(57)の2点がある。これらのことから本址の時期は、平安時代前期(9世紀後半)に属すると考える。本址の廃棄埋没後に、掘り込みの浅い8住が建てられたとみられる。

第4号住居址(第7回)

調査区の中央やや南で検出した。他遺構との切り合いは、13土、19土に切られる。規模、平面形は東西418cm×南北416cmの隅丸方形を呈する。床面積は12.9㎡を測る。壁は比較的遺存状況がよく、平均で34cmを測り、やや緩やかに立ち上る。覆土は黒褐色砂質土の単層である。床面は礫混じりの褐色土で、あまり良好とはいえない。ピットも検出されず、柱穴は不明である。カマドも検出することはできなかった。遺物の量は、灰釉陶器の椀等図化できたものは5点と少ないが、ここからも、文字は不明であるが墨書土器が1点出土している。これらのことから判断して、本址の時期は平安時代後期(11世紀後半)に属すると考える。また、後述するが、本址を切る19土も同時期であるとみられることから、何らかの関係があるのかもしれない。

第5号住居址(第7回)

調査区中央やや西で検出した。他遺構との切り合い関係は、24土に切られる。規模、平面形は東西476cm×南北452cmの隅丸長方形を呈する。床面積は15.9㎡を測る。壁は、比較的遺存状況はよく42cmを測り、緩やかに立ち上る。覆土は3層に分かれ、I層は礫を少量含む黒褐色土、II層は礫を多く含む暗褐色土、III層は暗褐色砂質土である。床面は、礫混じりの褐色土でややしまっている。ピットは7個確認したが、いずれからも柱痕は検出されず、主柱穴を判断するのは難しい。カマドは東壁中央より検出した。袖も比較的残りがよく、内側もよく被熱しており、焼土も内側一面に広がる。また周辺に川原石が多くみられたが、被熱したものはないことから、構造は粘土カマドであろう。煙道は一部が残存している。遺物は、須恵器の杯Aを中心に出土がみられ、図化できた土器は16点を数える。このうち墨書土器は2点みられたが、記された文字は不明である。鉄製品はほぼ完形の刀子が1点(鉄-3)出土している。特殊なものとしては、脚部のみではあるが十字の透かしのある円面硯が1点、石製の鈍尾が1点出土している。本址の時期は、遺物等から判断して平安時代前期(9世紀前半)に属すると考える。

第6号住居址(第7回)

調査区中央やや北で検出した。他遺構との切り合い関係は、20土を切る。南側の壁が、撓乱によって削平されているため、遺存状況は良好ではないが、規模、平面形は東西408cm×南北320cmの隅丸長方形を呈する。床面積は9.3㎡を測る。壁は比較的遺存状況がよく、残存部分で40cmを測り、緩やかに立ち上る。覆土は単層で黒褐色砂質土である。床面は礫混じりの褐色土でややしまっている。ピットは1個検出されたのみで、柱痕も確認されず、柱穴であると判断することはできない。カマドは東壁中央より検出した。周囲は激しく撓乱を受けており、上半部は破壊されている。下部は残存しており、被熱した面を確認した。またカマド内より出土した川原石の多くが被熱を受けていたことから、石組みカマドであろうと思われる。遺物については、カマド周辺を中心に多く出土がみられ、図化できるものは14個を数える。本址から出土した墨書土器は「上」と記されたもの(105)、「田」・「?」2文字記されたもの(106)の2点である。また、転用硯とみられる、墨痕のある灰釉椀も1点(104)出土している。時期については、遺物等から判断して、平安時代前期(9世紀後半)に属すると考える。

第7号住居址(第7図)

調査区中央やや東で検出した。他遺構との切り合い関係はない。南側の一部が調査区外にかかるため全体の規模・平面形は不明であるが、残存する部分の規模は東西372cm×南北(324cm)である。壁は比較的遺存状況はよく44cmを測り、やや緩やかに立ち上る。覆土は2層に分かれ、上層は暗褐色砂質土で、下層は小礫を多く含む暗褐色土である。床面は礫混じりの褐色土でよくしまっている。ピットは4個検出したが、いずれからも柱痕は確認できず、支柱穴と判断することはできなかった。カマドは調査区外にあると思われ、検出することはできなかった。遺物については、激しく攪乱を受けていたため出土量も多くなく、図化できたもので6点である。しかしここでも墨書土器が1点(110)出土し、「田」と明瞭に読み取れる。鉄製品は、刀子が1点(鉄-4)出土している。これらのことから判断して、本址の時期は平安時代前期(9世紀後半)に属すると考える。

第8号住居址(第6図)

調査区の南部で検出した。他遺構との切り合い関係は、3住を貼る。当初は3住1軒の単独プランと考えたが、3住の外側からも遺物の出土がみられ、また3住とは異なる方向に振ったプランを確認したため、別の住居址8住として扱うことにした。全体の規模・平面形については、既に3住のみの単独住居址であるとの判断で掘り下げを行った後であったことと、上半部が激しく攪乱を受け、かつ削平されていたことから明らかにすることはできない。そうしたことから壁の遺存状況も悪く、残存部で6cmを測るのみである。覆土は、当初3住の上層として扱った、礫を多く含む黒褐色土で単層である。床面は、残存部分の所見では礫混じりの褐色土でややしまっている。ピットは4個確認したが、いずれからも柱痕は検出されず、支柱穴を判断することは難しい。カマドも検出することはできなかった。遺物は、当初3住に属するものとして扱ったもののうち、覆土上層より出土した小型の土器器杯・椀が、3住床面でみられた遺物と異なった様相を呈し、かなり新しい時期のものであることが明らかとなった。こうしたことから本址は、3住廃棄埋没後に建てられた平安時代後期(11世紀後半)に属する住居址であると考えられる。

2 土坑(第8図)

今回の調査では28基の土坑を検出した。しかし、用途の判明できるものは少なく、また遺物の量も少ない。ここでは、遺物を伴うもの、用途について考えうものの数個について述べていきたい。

第1号土坑

調査区南部で検出した。他遺構との切り合い関係は、3住、8住を切る。規模、平面形は長軸134cm×短軸96cmの楕円形を呈する。覆土は単層で、小礫を多く含む黒褐色砂質土で、褐色砂質土の地山を掘り込み、深さは20cmを測る。断面形は逆台形を呈する。底部は褐色砂質土の地山で平坦である。遺物は、灰釉陶器の段皿(115)の他、若干の土器片の出土をみたのみである。本址の用途は不明である。時期については、遺物から判断して平安時代中期(11世紀前半)であると考えられる。

第7号土坑

調査区中央やや西寄りで検出した。他遺構との切り合い関係はない。規模、平面形は長軸84cm×短軸70cmの楕円形を呈する。覆土は小礫を少量含む暗褐色砂質土の単層で、褐色砂質土の地山を掘り込み、深さは25cmを測る。断面形は半円形を呈する。底部は褐色砂質土の地山である。遺物は、灰釉陶器の短頸壺(116)の他、若干の土器片の出土をみたのみである。本址の用途は不明である。時期については、遺物から判断して平安時代前期(9世紀中頃)であると考えられる。

第19号土坑

調査区南部で検出した。他遺構との切り合い関係は、4住を切る。規模、平面形は長軸216cm×短軸168cm

の長円形を呈する。覆土は中礫を多く含む黒褐色砂質土の単層で、4住の覆土である黒褐色砂質土に掘り込まれる。そのため検出は困難であり、礫の有無をもって峻別した。深さは23cmで、断面形は皿状を呈し、底部はほぼ平坦である。遺物は土器6点であり、それらは、北端部から小型の土師器杯が1点(118)、南端部から灰釉陶器碗1点(117)と、小型の土師器杯4点(119、120、121、122)の計5点がまとまった形で出土した。墓址の可能性を考えて、覆土も詳細な調査をしたが、骨片、骨粉等を検出することはなかった。しかし、遺物の出土状態から判断して、本址は墓址(土坑墓)であると考えて差し支えないだろう。但し頭部がどちらの方向を向いていたかは判断することはできない。時期については、平安時代後期(11世紀後半)に属すると考える。また、前述したように、本址に切られる4住と時期差がほとんどないことから、4住に関係する人物の墓址と考えてよいかもしれない。

第30号土坑

調査区南部で検出した。他遺構との切り合い関係はない。平面形は長軸53cm×短軸50cmのほぼ円形を呈する。覆土は暗褐色砂質土の単層で、礫混じりの褐色土の地山に掘り込まれる。深さは30cmで、断面形は半円形を呈する。遺物の出土はなかった。しかし本址はその位置から、3住に関連する遺構(カマドの煙出しビット等)ではないかと思われる。時期については、3住と同じく、平安時代前期(9世紀後半)であると考えられる。

3 ビット

今回の調査では、9個のビットを検出した。しかし、いずれも単独に掘り込まれたものであるため、建物址等を構成するものとするのは難しい。調査区全体が砂礫混じり土の地山であるため、仮に柱址であったとしても、柱痕は残りにくかったのではないだろうか。また遺物も、いずれからも出土はみられず、用途の明らかなものはなかった。

第1表 住居址一覧表

住居址No.	区画No.	形状	規模 長×短×高さ(m) 床面積(㎡)	方位	地下形 種類・位置	時期	備考
1	6	隅丸長方形	(492)×332×44 (15.1)	N-99°-E	不明 東壁中央	9世紀末	区域外にかかる 27土に切られる
2	6	不明	536×(248)×- (8.4)	N-15°-E	不明	9世紀後半	区域外にかかる
3	6	隅丸長方形	524×(320)×28 (13.8)	N-96°-E	不明 東壁中央	9世紀後半	区域外にかかる 8住に貼られる 1・3土に切られる
4	7	隅丸方形	418×416×34 12.9	N-13°-E	不明	11世紀後半	13・19土に切られる
5	7	隅丸長方形	476×452×42 15.9	N-100°-E	粘土 東壁中央	9世紀前半	24土に切られる
6	7	隅丸長方形	408×(320)×40 (9.3)	N-114°-E	石組 東壁中央	9世紀後半	20土を切る 南側は削平され壁不明
7	7	隅丸長方形	(372)×324×44 (9.3)	N-10°-E	不明	9世紀後半	区域外にかかる
8	6	不明	-×-×6 不明	不明	不明	11世紀後半	区域外にかかる 3住を貼る

第2表 土坑一覧表

土坑No.	区画No.	形状	規模 長さ×幅×深さ(m)	時期	備考
1	8	楕円形	134×96×20	11世紀前半	遺物115出土 3住を切る
2	-	-	-	-	欠番: 8住-P2に変更
3	8	長円形	84×74×11	不明	3住を切る
4	-	-	-	-	欠番
5	8	長円形	85×80×25	不明	
6	8	楕円形	126×86×9	不明	
7	8	楕円形	84×70×25	9世紀中頃	遺物116出土
8	8	長円形	84×70×34	不明	
9	8	楕円形	(114)×104×29	不明	一部区域外にかかる
10	8	円形	61×52×20	不明	
11	8	円形	56×50×18	不明	
12	8	長円形	82×48×30	不明	
13	8	不整形円形	98×86×17	不明	4住を切る
14	8	溝状	360×96×14	不明	
15	8	楕円形	110×72×38	不明	
16	8	円形	70×68×17	不明	
17	8	円形	65×62×19	不明	
18	8	不整形円形	93×80×29	不明	
19	8	長円形	216×168×23	11世紀後半	墓址 遺物117~122他出土 4住を切る
20	8	長方形か	280×132×22	不明	20住に切られる
21	8	楕円形	71×55×22	不明	
22	8	長円形	56×41×26	不明	
23	8	円形	59×56×26	不明	
24	8	円形	71×66×12	不明	5住を切る
25	8	楕円形	86×55×10	不明	
26	8	円形	41×40×30	不明	6住を切る
27	8	円形	56×54×32	不明	1住を切る
28	8	円形	45×41×44	不明	
29	8	長円形	53×39×7	不明	
30	8	円形	53×50×30	9世紀前半	3住関連遺構か

第3節 遺物

1 平安時代の土器・陶器

① 概観

向原遺跡から出土した土器・陶器の種類は、土師器・黒色土器A（内面黒色処理）・B（内外面黒色処理）・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がみられる。これらのほとんどが、竪穴住居址・土坑などの遺構から出土した。ここでは、可能な限り図化・提示し、検点数129点について器種・器形の分類とそれらの年代観について記述する。なお、本報告書で用いる器種・器形および土器群の年代観は、文献1を参照した。

第3表 松本平における土器編年

実年代	700			800			900			1000			1100		
	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期
時期															

② 各遺構出土の土器群

第1号住居址出土土器群（第9図）

食膳具は、黒色土器A・土師器・軟質須恵器・灰釉陶器で構成される。器形別にみると、杯は黒色土器A（7、12）、土師器（8～11、13、17）、軟質須恵器（5、6）にみられる。椀は、灰釉陶器（1～3）、黒色土器A（14、15）にある。灰釉陶器椀は、すべて漬け掛け施軸で光ヶ丘1号窯式に比定できる。その他の器形では、灰釉陶器に耳皿（4）がみられる。煮炊具は、土師器甕（19）、小型甕（18）で構成される。貯蔵具は、灰釉陶器瓶類（16）、須恵器甕（21）がある。その他特殊品として土師器円筒形土器（20）がある。これらの土器様相から、本址土器群の時期は8期（9世紀末）と考えられる。

第2号住居址出土土器群（第10図）

食膳具は、黒色土器A・軟質須恵器・須恵器・灰釉陶器で構成される。器形別では、杯は黒色土器A（22～26、28・30・34～36、38）、軟質須恵器（31）、須恵器杯B（39）と3器種にみられる。椀は、黒色土器A（27、29）、灰釉陶器（32、33、37）で構成される。灰釉陶器椀の32・33は刷毛塗り施軸されるもので、光ヶ丘1号窯式に比定される。37は、内面に流し掛け施軸され、内面見込み部と底裏にトチン痕が認められる。黒笹14号窯式に比定される。煮炊具では、土師器甕がある。貯蔵具では須恵器長頸壺（40）、短頸壺（41）四耳壺（42）、甕（45）がみられる。これらの土器様相から本址土器群の時期は、7期（9世紀後半）と考えられる。

第3号住居址出土土器群（第11図）

食膳具は、黒色土器A・黒色土器B・灰釉陶器・須恵器の器種にみられる。杯は、黒色土器A（46、49～57、67、68）と須恵器（72、73）にみられる。49は、腰部に手持ちヘラケズリがされている。椀は、黒色土器A（48、69）、灰釉陶器（70）にみられる。70は刷毛塗り施軸されているもので、光ヶ丘1号窯式に比定される。48、57、67、68、69には墨書がみられる。このほか黒色土器B皿Bが1点（65）、黒色土器A鉢Aも出土している。煮炊具は、土師器小型甕D（58～60）、貯蔵具は、須恵器長頸壺（71）がみられる。本址土器群の時期は、7期（9世紀後半）と考えられる。

第4号住居址出土土器群（第11図）

出土点数が少なく、図化できたのは5点のみである。すべて食膳具で、内訳は土師器杯（76・77）、土師器甕（74）、黒色土器椀A（78）、灰釉陶器椀（75）である。78には墨書がみられる。また、75の内面見込み部

には僅かに墨痕が確認できるため、転用碗の可能性はある。77の外面には、墨痕が確認できる。本址土器群の時期は、出土点数が少ないため判然としないが、13～14期（11世紀後半）と考えられる。

第5号住居址出土土器群（第12図）

食器は、須恵器杯A、黒色土器A杯A（87～89）がある。須恵器杯Aは6点（79～84）ある。これらの外傾指数（註1）は、89～107で平均値は96.4であるが、84（外傾指数107）や79（外傾指数98.6）のように体部の開きが大きいものがみられる。煮炊具は、土師器甕B（90）、小型甕（91・92）、貯蔵具は須恵器長頸壺（86）がある。その他の特殊品として、須恵器円面碗（93）が出土した。残存状況は、脚部の1/10程度で小片であるが、脚部外面には沈線が巡り、十字形の透かし（単位は不明）がみられる。本址土器群は、6期（9世紀前半）に比定される。

第6号住居址出土土器群（第12図）

食器は、黒色土器A、土師器、灰釉陶器、軟質須恵器で構成される。杯は、黒色土器A（99）、土師器（101、102）、軟質須恵器（100）にみられる。椀は灰釉陶器（104）があり、内面に墨痕がみられるため、転用碗として使用された可能性がある。皿は、灰釉陶器に2点（105・106）あり、いずれにも墨書がみられる。煮炊具は、土師器甕B（95）、小型甕（96、97、98、107、108）がみられる。貯蔵具は、須恵器長頸壺（103）のみ。本址土器群は、7～8期（9世紀後半）に帰属するものと考えられる。

第7号住居址出土土器群（第13図）

器種では、黒色土器A・土師器・灰釉陶器がみられる。出土土器の中で食器が少なく、黒色土器A杯A 3点（109～111）のみである。110には墨書がみられる。煮炊具は、土師器甕B（113）、小型甕D（112）がある。貯蔵具は、灰釉陶器瓶類（114）1点のみ。本址土器群の時期は、出土量が少なく判然としないが7～8期（9世紀後半）と考えられる。

第8号住居址出土土器群（第13図）

出土点数が少なく、土師器杯2点（63、64）、椀1点（62）の計3点のみである。杯は口径9.4～9.7cmで、小型化したものである。出土量が少なく時期が判然としないが、杯の法量・器形から13～14期（11世紀後半）と推定される。

土坑19出土土器群（第13図）

土師器杯5点（118～122）、灰釉陶器椀（117）の6点が出土した。土師器杯は、口径9.0～10.2cmの小型化したものである。灰釉陶器椀は、つくりが厚手で底部から腰部ナデ調整される。施釉は漬け掛けによって、内外面される。丸石2号窯式に比定される。本址土器群の時期は、13～14期（11世紀後半）と考えられる。

註

註1：外傾指数は、 $\frac{(\text{口径}-\text{底径})}{2} \div \text{器高} \times 100$ で求めた。

参考文献

1：長野県埋蔵文化財センター 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 一松本市内その1— 総論編」

③ 文字資料

墨書土器は、総計14点出土した。出土した遺構は、Aトレンチ出土品を除けばすべて住居址からの出土である。出土量は3住が最も多く5点みられ、次いで2・5・6住が各2点、4・7住・Aトレンチが各1点である。書かれた文字は、「田」が多く3・6・7住・Aトレンチから計4点出土した。他に判読できた文字

としては、「良」（2住）、「真」（3住）、「上」（6住）などがみられる。墨書される器種は、黒色土器Aが10点、須恵器・土師器各2点で黒色土器Aが圧倒的に多く、全体の71%を占める。墨書される部位は、体部外面11点（79%）、底裏3点（21%）で体部外面にされるものが最も多い。文字の向きは、69が横位のほかは、すべて逆位である。時期別では、5住が6期に比定される以外はすべて7～8期のものである。

第4表 向原遺跡墨書土器一覧

No.	出土遺跡	住	器種	器形	文字	墨書部位	文字の向き	備考	
30		2住	7	黒色土器A	杯A	良	体部外面	逆位	
38		"	"	黒色土器A	杯A	?	体部外面	逆位?	
48		3住	7	黒色土器A	椀	田	体部外面	逆位	
57		"	"	黒色土器A	杯A	真	体部外面	逆位	
67		"	"	黒色土器A	杯A	?	体部外面	逆位	
68		"	"	黒色土器A	杯A	?	体部外面	逆位	
69		"	"	黒色土器A	皿B	?	体部外面	横位	
78		4住	?	黒色土器A	椀	?	体部外面	正位	混入品か
82		5住	6	須恵器	杯A	?	体部外面	?	
83		"	"	須恵器	杯A	?	底裏	—	
105		6住	7～8	灰輪陶器	皿	上	底裏	—	
106		"	"	灰輪陶器	椀	田	底裏	—	
						?	底裏	—	2箇所あり
110		7住	7～8	黒色土器A	杯A	田	体部外面	逆位	
127	Aトレンチ	?		黒色土器A	杯A	田	体部外面	逆位?	

2 古墳時代の土器（第13図）

向原遺跡からは、現在まで古墳時代の遺物は出土しておらず、包含層からの出土ではあるが、今回の出土例は、本遺跡の性質を明らかにする上でも貴重な発見であるといえる。

この時代の土器で図示しうるのは（129）のみである。わずかに口縁が外反する甕型の土器であるが、底部を欠失しているため、台付甕である可能性も考えられる。紋様構成は、頸部から上半部にかけては横方向のハケメ、下半部は縦方向のハケメがそれぞれ施され、意識的に分けられているようである。特徴としては、口縁部の仕上げが中途半端である印象を受ける。これは意図的に未製品様を呈しているようにも思われ、或いは別の土器を模して作られたようにも見受けられる。いずれにせよこの土器は、当地方においては他に類例を見ない珍しい形式のものであるといえる。時期については、同じ包含層中からの出土遺物として、退化した二重口縁を有する土器片が見られることから、4世紀末から5世紀にかけての遺物であると考えられる。

3 石製品（第14図）

今回の調査では、1点の石製の鉈尾が、5住より出土している。鉈尾は、鉈具、丸鉈、巡方とともに古代の帯を飾った装飾品で、帯の先端に留金などで装着されるものである。古代の帯は官位に応じて違いがあるといわれる。材質は銅製のものが多く、その他に石製、鉄製のものもみられる。市内においても、三間沢川左岸遺跡（昭和62年調査：概報報告）、大村遺跡（昭和62年調査：未報告）などで出土しているが、その多く

は銅製で、石製のものは少ない。当遺跡のものは石製である。4つの角のうち1つのみが残存しており、先端部分と思われる部分には丸みがつけられている。表面と側面はよく研磨されていて光沢がある。裏面にくぐり孔が3ヶ所あり貫通している。留金は残存していない。残存状況が2/3程度であるため、当初は巡方の可能性も考えたが、文献2の例より鈍尾と判断した。材質は、安山岩系の非常に緻密な噴出岩であるが、産地については特定することは困難である。量は、長辺5.4cm（残存部）、短辺4.3cm、厚さ0.8cmを測る。

参考文献

2：東日本埋蔵文化財研究会 1997「第6回 東日本埋蔵文化財研究会 遺物からみた律令国家と蝦夷 一資料集第II分冊一 南関東・北陸・中部」

4 金属製品（第14図）

今回の調査では、鉄製品が総計で11点出土している。すべて奈良・平安時代に属するものとみてよい。分類は文献3に基づいた。

刀子は4点の出土であった。すべて住居址内からの出土である。2住からは2点（鉄-1、鉄-2）、5住から1点（鉄-3）、7住から1点（鉄-4）であった。鉄-1は、身部先端と基部先端を欠失している。両側に関を持ち、身部先端に向かって徐々に減幅する4類である。鉄-2は身部先端と基部先端が欠失し、3つに軽く折れ曲がっている。関を持たない。鉄-3は完形品である。両側に関を持ち、刃部はゆるやかなS字を呈している。分類は6類である。鉄-4は、身部先端と基部先端を欠失している。棟部に関を持つが、刃部の関は不明瞭である。

釘は、1住から2点（鉄-5、鉄-6）出土している。両方とも頭部を欠失している。

芋引鉄が、2住から1点（鉄-7）出土している。両端は1ヶ所ずつ穿孔されており、その周囲には木質部が付着している。

不明品は4点である。鉄-8は5住出土の毛抜き状鉄製品である。鉄-9は1住出土で、三角形を呈し、断面は方形である。鉄-10は3住出土で、方形を呈し、2つに折れ曲がっている。長辺の一部に刃らしきものが付いており、何らかの刃物であろう。鉄-11は5住出土で、一部に木質部が付着している。芋引鉄の一部かもしれない。

参考文献

3：館長野塚埋蔵文化財センター 1989「中央自動車道長野野塚埋蔵文化財調査報告3 吉田川西遺跡 本文編」

第5表 向原遺跡金属製品一覧

単位（長さ・幅・厚さ：cm、重量：g）、現存値

品名	器種	遺構	長さ	幅	厚さ	重量	備考
鉄-1	刀子	2住	6.5	1.2	0.4	6	
鉄-2	刀子	2住	4.6	1.0	0.4	4	
鉄-3	刀子	5住	13.9	1.6	0.4	16	完形品
鉄-4	刀子	7住	8.3	1.4	0.4	12	
鉄-5	釘	1住	3.0	0.6	0.3	1	
鉄-6	釘	1住	3.9	0.4	0.4	4	
鉄-7	芋引鉄	2住	8.7	2.2	0.2	14	
鉄-8	不明	5住	6.4	1.2	0.3	6	毛抜き状鉄製品
鉄-9	不明	1住	4.1	3.0	0.4	16	
鉄-10	不明	3住	7.7	3.9	0.2	20	刃物か
鉄-11	不明	5住	3.6	0.9	0.4	6	芋引鉄か

第6表 向原遺跡出土土器一覽(1)

No.	土器 遺構	種類	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高 (cm)	容積 (cc)	発見 日付	発見 底高	状態			備考	
										破	割	欠		
1	1住	灰釉陶器	柄	(13.4)	(5.6)	4.2	1/3	1/2	ロコナ	底部破ヘラケズリ付高合/ナナ				
2	1住	灰釉陶器	柄	(13.8)	(7.0)	4.3	1/6	1/2	ロコナ	底部破ヘラケズリ付高合/ナナ				
3	1住	灰釉陶器	柄	(15.6)	(7.4)	(5.1)	一部	粗欠	ロコナ	底部破ヘラケズリ付高合/ナナ				
4	1住	灰釉陶器	耳皿	—	(4.2)	—	—	1/3	ロコナ	底部破未収	施			
5	1住	軟質須恵器	杯	(13.2)	(5.2)	3.9	1/2	1/3	ロコナ	底部破未収				
6	1住	軟質須恵器	杯	(12.8)	(6.2)	3.6	1/4	1/4	ロコナ	内面ロコナ				
7	1住	黒色土器A	杯	(13.2)	(5.2)	4.0	1/2	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
8	1住	土師器	杯	12.4	5.9	2.9	1/2	完	ロコナ	内面ロコナ	底部破未収			
9	1住	土師器	杯	(12.4)	(5.4)	3.7	1/3	完	ロコナ	内面ロコナ	底部破未収			
10	1住	土師器	杯	11.7	5.0	3.3	2/3	完	ロコナ	内面ロコナ	底部破未収			
11	1住	土師器	杯	12.5	5.0	3.8	1/4	完	ロコナ	内面ロコナ	底部破未収			
12	1住	黒色土器A	杯	(13.0)	(4.0)	3.25	一部	1/3	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
13	1住	土師器	杯	12.9	5.6	3.8	完	完	ロコナ	内面ロコナ	底部破未収			
14	1住	黒色土器A	柄	14.1	6.8	4.9	3/4	粗欠	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収付高合/ナナ				
15	1住	黒色土器A	柄	14.1	7.2	4.8	1/4	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収付高合/ナナ				
16	1住	灰釉陶器	長頸壺	—	(9.8)	—	—	1/4	ヘラケ	内面ロコナ	底部破ヘラケズリ付高合/ナナ			
17	1住	土師器	杯	(13.8)	(5.6)	4.5	1/5	完	ロコナ	内面ロコナ	底部破未収			
18	1住	土師器	小型壺	14.2	—	—	—	1/4	ナメ	内面ロコナ				
19	1住	土師器	壺	(18.8)	(10.0)	28.1	1/4	1/4	ナメ	ナメ	内面破損工具によるナ		内面炭化物付	
20	1住	土師器	円筒形	(13.0)	—	—	1/8	—	ナメ	内面破損工具によるナ				
21	1住	須恵器	壺	(37.6)	—	—	—	1/4	—	ロコナ	内面ロコナ	口縁台彫付		
22	2住	黒色土器A	杯	12.7	5.6	4.4	粗欠	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
23	2住	黒色土器A	杯	13.2	5.7	3.8	1/2	1/2	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
24	2住	黒色土器A	杯	13.3	6.4	4.1	3/4	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収/ナナ			外炭化物付	
25	2住	黒色土器A	杯	12.9	5.4	4.6	1/2	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
26	2住	黒色土器A	杯	13.3	6.9	4.3	完	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収			外炭化物付	
27	2住	黒色土器A	柄	16.4	4.0	5.5	4/5	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収付高合/ナナ				
28	2住	黒色土器A	杯	18.2	7.4	6.5	粗欠	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
29	2住	黒色土器A	柄	17.4	—	—	3/4	—	ロコナ	内面ミダキ				
30	2住	黒色土器A	杯	12.8	6.0	3.9	4/5	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収			墨書「鳥」有	
31	2住	軟質須恵器	杯	(13.1)	—	—	—	1/4	—	ロコナ	内面ロコナ			
32	2住	灰釉陶器	柄	(15.4)	—	—	—	1/8	—	ロコナ	ヘラケズリ	口縁施	内面ロコナ	
33	2住	灰釉陶器	柄	—	(7.8)	—	—	1/4	—	ロコナ	底部破ヘラケズリ付高合/ナナ			
34	2住	黒色土器A	杯	(13.2)	(6.9)	(5.3)	1/8	一部	ロコナ	内面ミダキ				
35	2住	黒色土器A	杯	(16.9)	(7.0)	5.7	1/4	一部	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収/ナナ				
36	2住	黒色土器A	杯	—	6.8	—	—	粗欠	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収/ナナ				
37	2住	灰釉陶器	柄	(13.1)	(7.9)	(4.5)	一部	1/2	ロコナ	底部破ヘラケズリ付高合/ナナ				
38	2住	黒色土器A	杯	—	(7.2)	—	—	1/2	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収/ナナ				墨書有
39	2住	須恵器	杯B	—	(11.3)	—	—	1/6	ロコナ	底部破ヘラケズリ付高合/ナナ				
40	2住	須恵器	長頸壺	—	5.0	—	—	—	ロコナ	ヘラケズリ	底部破未収付高合/ナナ			
41	2住	須恵器	短頸壺?	—	(10.1)	—	—	1/8	ロコナ	内面ロコナ	底部破未収/ナナ			
42	2住	須恵器	四耳壺	—	—	—	—	—	ロコナ	タタキ/駝付	内面ロコナ	底部破未収/ナナ		
43	2住	須恵器	四耳壺?	(18.4)	—	—	—	1/8	—	ロコナ	内面ロコナ			
44	2住	土師器	円筒形	—	—	—	—	—	ナメ	内面ナ				
45	2住	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	ロコナ	内面ロコナ			
46	3住	黒色土器A	杯	13.5	6.4	3.8	1/2	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
47	3住	黒色土器A	皿	(13.9)	(7.3)	3.1	2/3	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収付高合/ナナ				
48	3住	黒色土器A	柄	(15.4)	(7.2)	(5.0)	1/3	1/4	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収付高合/ナナ				墨書「鳥」有
49	3住	黒色土器A	杯	13.7	6.3	4.3	4/5	4/5	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
50	3住	黒色土器A	杯	(12.2)	(5.6)	(3.5)	1/5	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
51	3住	黒色土器A	杯	16.6	7.0	6.0	4/5	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
52	3住	黒色土器A	杯	(13.4)	(6.0)	(4.1)	1/3	1/2	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
53	3住	黒色土器A	杯	14.0	5.8	4.2	4/5	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
54	3住	黒色土器A	杯	13.0	6.5	3.8	3/4	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
55	3住	黒色土器A	杯	12.8	5.6	5.4	2/3	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
56	3住	黒色土器A	杯	13.6	5.4	3.8	粗欠	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				
57	3住	黒色土器A	杯	12.6	5.7	3.6	完	完	ロコナ	内面ミダキ 底部破未収				墨書「鳥」有
58	3住	土師器	小型壺	(12.8)	(7.0)	14.2	1/8	1/2	ナメ	内面ロコナ	底部破未収			
59	3住	土師器	小型壺	—	(7.2)	—	—	2/3	ナメ	内面ロコナ	底部破未収			
60	3住	土師器	小型壺	—	6.4	—	—	完	ナメ	内面ロコナ	底部破未収			
61	3住	土師器	鉢	—	(12.0)	—	—	1/4	ロコナ	内面ロコナ	底部破未収付高合?			
62	3住	土師器	柄	(12.8)	6.6	4.4	1/3	粗欠	ロコナ	底部破未収付高合/ナナ				8位の遺物
63	3住	土師器	杯	9.7	4.9	2.2	1/2	完	ロコナ	底部破未収				8位の遺物
64	3住	土師器	杯	9.4	4.8	2.4	粗欠	完	ロコナ	底部破未収				8位の遺物

第6表 向原遺跡出土土器一覧(2)

No.	高さ (cm)	形状	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存部 口縁 底面	形状	調査・発掘の状況	備考	
65	3住	黒色土器B	皿B	(14.4)	(7.6)	(2.6)	1/4	1/4	ロコナ内面:ロコ 底部同様に付合/ナナ	
66	3住	黒色土器A	皿	—	6.6	—	—	粗完	ロコナ内面:ロコ 底部同様に付合/ナナ	
67	3住	黒色土器A	杯	—	7.0	—	—	1/4	ロコナ内面:ロコ 底部同様に付合	遺物有
68	3住	黒色土器A	杯	(12.0)	—	—	1/12	—	ロコナ内面:ロコ	遺物有
69	3住	黒色土器A	碗	—	5.6	—	2/3	—	ロコナ内面:ロコ 底部同様に付合/ナナ	遺物有
70	3住	灰釉陶器	碗	—	(5.6)	—	—	1/3	ロコナ内面:底部同様に付合/ナナ	
71	3住	須恵器	長頸壺	(10.4)	—	—	—	1/3	—	
72	3住	須恵器	杯	—	(5.0)	—	—	1/2	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
73	3住	須恵器	杯	(13.0)	(5.4)	(3.8)	1/12	一部	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
74	4住	土師器	盤	—	9.0	—	—	一部	内面:ロコナ 底部同様に付合/ナナ	
75	4住	灰釉陶器	碗	—	6.8	—	—	1/2	ロコナ内面:付合/ナナ	遺物有 転写済
76	4住	土師器	杯	(9.6)	—	—	1/4	—	ロコナ内面:ロコナ	
77	4住	土師器	杯	(13.3)	—	—	1/4	—	ロコナ内面:ロコナ	外周部付着
78	4住	黒色土器A	杯	(7.0)	—	—	1/8	—	ロコナ内面:ロコ	遺物有
79	5住	須恵器	杯	(12.9)	(5.6)	3.7	1/3	一部	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
80	5住	須恵器	杯	(13.0)	—	—	1/2	一部	ロコナ内面:ロコナ	
81	5住	須恵器	杯	(12.9)	—	—	1/8	—	ロコナ内面:ロコナ	
82	5住	須恵器	杯	(13.6)	(6.8)	(3.7)	1/4	4/5	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	遺物有
83	5住	須恵器	杯	(13.0)	(5.5)	4.2	1/4	4/5	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	遺物有
84	5住	須恵器	杯	(13.4)	(5.1)	4.0	1/6	—	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
85	5住	須恵器	杯Bか	—	(5.3)	—	—	1/4	ナズ内面:ロコナ 底部同様に付合/ナナ	
86	5住	須恵器	長頸壺	—	—	—	—	—	ロコナ内面:ロコナ	
87	5住	黒色土器A	杯	(14.0)	—	—	1/4	—	ロコナ内面:ロコ	
88	5住	黒色土器A	杯	(14.4)	—	—	1/4	—	ロコナ内面:ロコ	
89	5住	黒色土器A	杯	—	(7.8)	—	—	完	ロコナ内面:ロコ 底部同様に付合/ナナ	
90	5住	土師器	甕	(18.0)	—	—	1/10	—	ナズ内面:ロコナ	
91	5住	土師器	小型甕	(13.4)	—	—	1/10	—	ナズ内面:ナズ	
92	5住	土師器	小型甕	—	6.6	—	—	完	ナズ内面:ロコナ	
93	5住	須恵器	円面碗	—	(12.0)	—	—	1/10	ロコナナ 字跡の透かし彫り	
94	5住	土師器	耳皿	—	—	—	—	—	—	
95	6住	土師器	甕	—	10.4	—	—	粗完	ナズ内面:ナズ 底部ナズ	
96	6住	土師器	小型甕	—	5.0	—	—	粗完	ナズ内面:ロコナ 底部同様に付合	
97	6住	土師器	小型甕	(10.4)	6.6	—	1/6	粗完	ナズ内面:ロコナ 底部同様に付合	
98	6住	土師器	小型甕	—	7.2	—	—	完	ナズ内面:ロコナ 底部同様に付合	
99	6住	黒色土器A	杯	17.0	7.7	5.2	2/3	完	ロコナ内面:ロコ 底部同様に付合	
100	6住	軟質須恵器	杯	(14.0)	6.0	5.5	1/3	粗完	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	ナズ状物付着
101	6住	土師器	杯	(13.0)	(6.0)	(4.0)	1/4	1/4	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
102	6住	土師器	杯	—	(6.4)	—	—	1/4	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
103	6住	須恵器	長頸壺	(10.0)	—	—	—	1/6	—	
104	6住	灰釉陶器	碗	—	(8.8)	—	—	粗完	ロコナ内面:底部同様に付合/ナナ	遺物有 転写済
105	6住	灰釉陶器	皿	(14.8)	(7.4)	2.9	1/8	完	ロコナ内面:底部同様に付合/ナナ	遺物有 上清
106	6住	灰釉陶器	碗	—	(8.0)	—	—	完	ナズ内面:ロコナ 底部同様に付合/ナナ	遺物有 上清
107	6住	土師器	小型甕	—	(7.0)	—	—	1/3	ナズ内面:ロコナ 底部同様に付合	
108	6住	土師器	小型甕	—	(6.4)	—	—	1/3	ナズ内面:ロコナ 底部同様に付合	
109	7住	黒色土器A	杯	12.9	6.3	4.8	1/2	完	ロコナ内面:ロコ 底部同様に付合	
110	7住	黒色土器A	杯	12.3	6.8	3.7	3/4	完	ロコナ内面:ロコ 底部同様に付合	遺物有 上清
111	7住	黒色土器A	杯	(12.6)	(6.2)	3.9	一部	3/4	ロコナ内面:ロコ 底部同様に付合	
112	7住	土師器	小型甕	(11.4)	(6.4)	11.4	1/3	完	ナズ内面:ロコナ	
113	7住	土師器	甕	(20.8)	—	—	—	1/3	—	
114	7住	灰釉陶器	長頸壺	(8.3)	—	—	—	1/6	—	
115	1土	灰釉陶器	段皿	13.0	7.3	2.8	5/6	粗完	ロコナ内面:底部同様に付合/ナナ	
116	7土	灰釉陶器	短頸壺	(6.6)	—	—	—	1/4	—	
117	19土	灰釉陶器	碗	15.0	7.1	6.3	完	粗完	ロコナ内面:底部同様に付合/ナナ	
118	19土	土師器	杯	9.6	4.0	2.5	粗完	完	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
119	19土	土師器	杯	9.8	4.7	2.8	3/4	完	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
120	19土	土師器	杯	9.6	3.9	2.1	粗完	完	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
121	19土	土師器	杯	10.2	5.4	2.9	粗完	完	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
122	19土	土師器	杯	(9.0)	3.8	2.4	1/2	完	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
123	検面	須恵器	短頸壺	(7.0)	(7.2)	—	—	1/6	一部	ロコナ内面:ロコナ 付合/ナナ
124	Aトレ	灰釉陶器	碗	(13.0)	(7.4)	4.4	一部	1/2	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合/ナナ	
125	Aトレ	土師器	杯	(13.2)	(6.6)	3.5	1/2	1/2	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
126	Aトレ	軟質須恵器	杯	12.3	5.8	3.4	2/3	完	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	
127	Aトレ	土師器	杯	(13.8)	(7.2)	3.5	1/3	3/4	ロコナ内面:ロコ 底部同様に付合	
128	Bトレ	土師器	杯	(12.6)	(4.2)	3.7	一部	完	ロコナ内面:ロコナ 底部同様に付合	遺物有
129	Eトレ	土師器	台付甕	(9.8)	—	—	粗完	—	上層へナズ 下層へナズ内面ナズ付合	古墳時代の土器

第4章 調査のまとめ

向原遺跡の調査は今回が初めてである。以前からこの付近で弥生時代～平安時代の遺物が出土することは知られていた。しかし現在まで発掘調査は行われておらず、また近年著しく進んだ宅地開発といったことから実体も不明であった。

今回の調査での成果としては、①平安時代集落の確認、②文字資料、帯飾りを同時に出土する住居址の確認、③古墳時代の包含層の確認といった点が挙げられる。ここでは、これらの点について簡単に考察してみたい。

①について、現代の掘削にかなり削平されながらも、平安時代に属する住居址が全部で8軒検出された。またそれらの時期についてもすべて明らかにすることができ、集落の実態解明に若干ながらも近づくことができた。今回調査した8軒の住居址は、検出当初はその配置から、道的空間を挟んだ2つのグループ(北側に3軒、南側に5軒)に分かれる単一時期の集落となるのではないかと考えた。しかし出土遺物の分析から、時期別に1)9世紀前半期に1軒(5住)、2)9世紀後半期に5軒(1、2、3、6、7住)、3)11世紀後半期に2軒(4、8住)という3期に分かれることが明らかになった。また土坑も、遺物の出土したものが少ないため何ともいえないが、住居址が展開した時期とはほぼ同じ時期のものが見られ、19土など11世紀まで下るものもあるが、中心となる時期は9世紀後半であろう。これは第3章第3節でも述べたように、松本平の土器編年で7～8期にあたり、この周辺で調査・確認されている多くの遺跡(百瀬、小池等)の平安時代集落の最盛期とも合致する。平安時代後期になると、やはり周辺の他の遺跡と同様、住居址数は減少する。これに対して田川対岸の平田本郷遺跡、小原遺跡周辺においては、この時期にも集落が存続し、更に中世へと続いていく。田川右岸に展開していた向原などの集落の住人も、奈良井川と田川に挟まれた微高地上の集落である平田本郷などへ移っていったのだろうか。

集落の範囲については、西は田川によって区画されると思われる。ただ現在の田川右岸堤防と1住(調査区西端)との距離は15m程度しか離れていないため、集落との距離が近すぎる感がある。向原遺跡の立地が、田川によって形成された河岸段丘上に展開していたと考えれば、当時の田川は、この付近では現在より若干西よりの流路をとっていたのかもしれない。北は、調査区付近より北側が、竹濶などの低湿地地へ向かって下がっている。これも集落の範囲を規定するものかもしれない。南及び東側については不明であるが、東については遺構の分布も疎らになっていくため、それほど広がらないと思われる。南は、現在の寿田町市営住宅の範囲あたりまでは広がっているのではないだろうか。今回の調査では、向原遺跡の範囲についてみれば北西部分の確認が出来たといえよう。

②について、今回の調査では14点の墨書土器が、ほとんど遺構(住居址)から出土し、判読の可能なものも多く出土している。特に5住からは2点の墨書土器に伴い、須恵器の円面硯、石製帯飾りの鉤尾が1点ずつ出土した。帯飾りは市内では三間沢川左岸遺跡や堀の内遺跡等から、金属製としては鉤具が5点、丸軻が4点、巡方が8点、鉤尾が3点出土しているが、石製としては丸軻が1点、巡方が4点出土しているのみで、石製の鉤尾は今回が初めての出土であり、また石材も今まではみられないものである。第3章第3節でも述べたが、帯金具は、古代の帯を飾る装飾品で、その帯自体官位によって差があるといわれる。すなわちこれを所有できる人物は官位を有し、帯を着用できる者=役人等と考えるのが妥当であろう。また同時に出土した円面硯も小片ではあるが、この住居址に、文字を書くことができる人物が居住していた可能性を示唆している。こうしたことから考えると、5住は役人或いはそれに類する人物が居住していた住居址なのであ

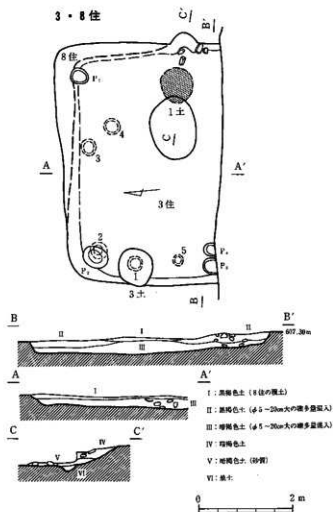
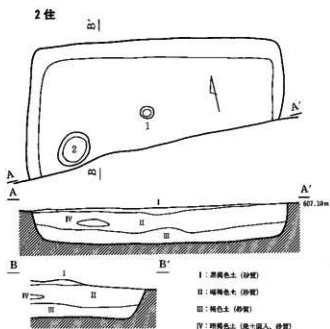
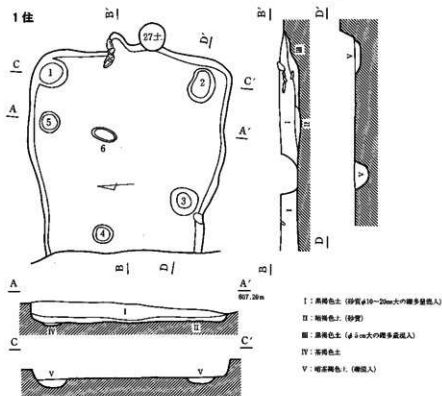
うか。ちなみにこの鈍尾であるが、調査の結果、2回にわたって破損したことが確認された。本来の帯飾りとして使用された後に、少し破損したようである。破損した面を再研磨した痕跡があることから、破損後も、財物として所有していたのかもしれない。現存状況はそれが更に破損したものと考える。

③について、向原遺跡は、弥生時代、奈良・平安時代の遺跡として知られていたことは先述の通りであるが、今回の調査範囲からは、弥生時代の遺構、遺物ともに全く確認されていない。周囲に竹瀬、百瀬といった遺跡もあることから、向原遺跡の範囲内にも牛伏川の影響を受けずに残った部分もあるのだろう。

古墳時代の遺跡としての向原は知られていない。今回の調査では、平安時代面より下の層を確認する機会を得た。弥生時代の遺構、遺物の確認を想定して深掘りトレンチを設定したところ、地表下290cmから茶褐色の粘質土の層が確認された。遺物として土師器の甕(129)の他に多くの土器小片が出土した(図版11参照)。この129自体はこの周辺では珍しい様式の土器であるが、伴出した土器小片が、第3章第3節で述べた通り4世紀末から5世紀にかけてのものであるとの結論に達した。このことから、向原遺跡の時代について、古墳時代の遺跡でもある可能性が出てきた。ただし、トレンチのみの調査であるため、遺構の確認はされていない。今後の周辺での調査事例の増加によって明らかになるであろう。

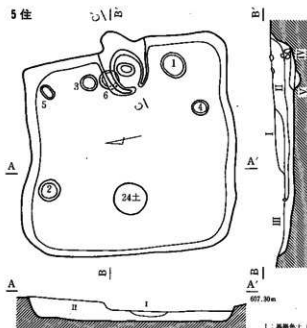
以上簡単ではあるが、今回確認された遺構及び遺物について若干の考察を行ってきた。何分にも実態の不明な遺跡の初調査であったため、細部については、今後の調査事例の増加に依るところ大であることは否めない。また担当者の知識の不足により、誤った解釈等をしている可能性もあるので、一読後のご指導、ご教示をいただければ幸いです。

最後になりましたが、梅雨時期から真夏にかけてという中で、発掘作業に参加していただいた皆様、また調査に際しては多大なご協力をいただいた(財)長野県雇用開発協会、寿田町町会の皆様方、また現地説明会にご参加いただいた皆様方に厚くお礼申し上げます。



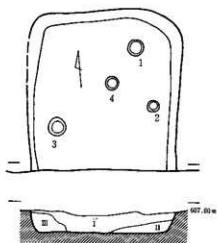
第6図 第1~3号、第8号住居址

5 住



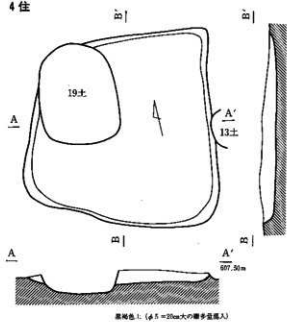
- I : 黒褐色土 (φ 2.0m 大の罐多量埋入)
- II : 黒褐色土 (φ 6-10m 大の罐多量埋入)
- III : 暗褐色土
- IV : 黄褐色土 (粘質)
- V : 暗茶褐色土 (地土塊多量埋入)
- VI : 赤褐色土 (灰化物層、地土塊多量埋入、粘質)

7 住



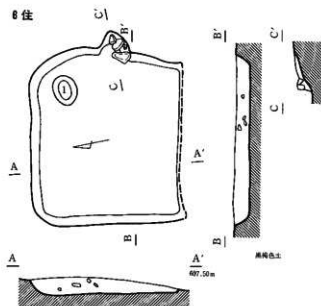
- I : 暗褐色土
- II : 暗褐色土 (小砂埋入)
- III : 暗褐色土 (小砂多量埋入)

4 住



黒褐色土 (φ 5-20m 大の罐多量埋入)

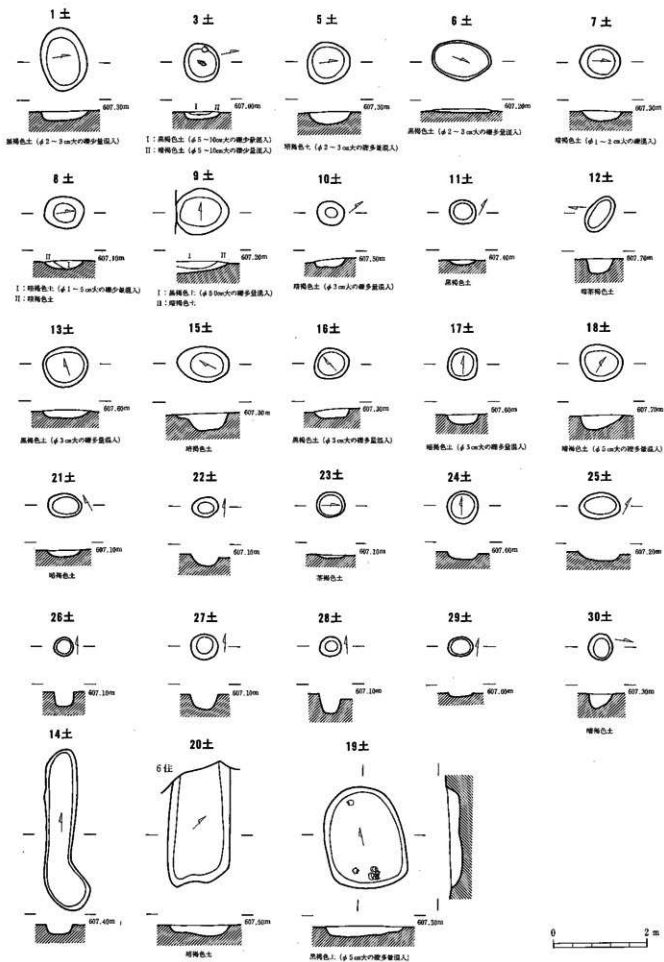
6 住



黒褐色土

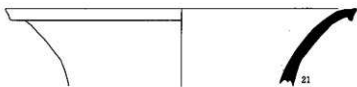
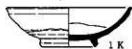
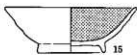
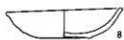
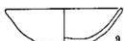
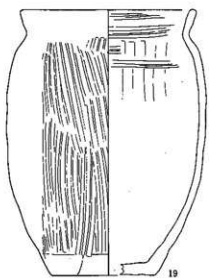
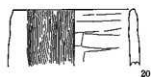


第7図 第4～7号住居址



第 8 図 土坑

1 住 (1~21)

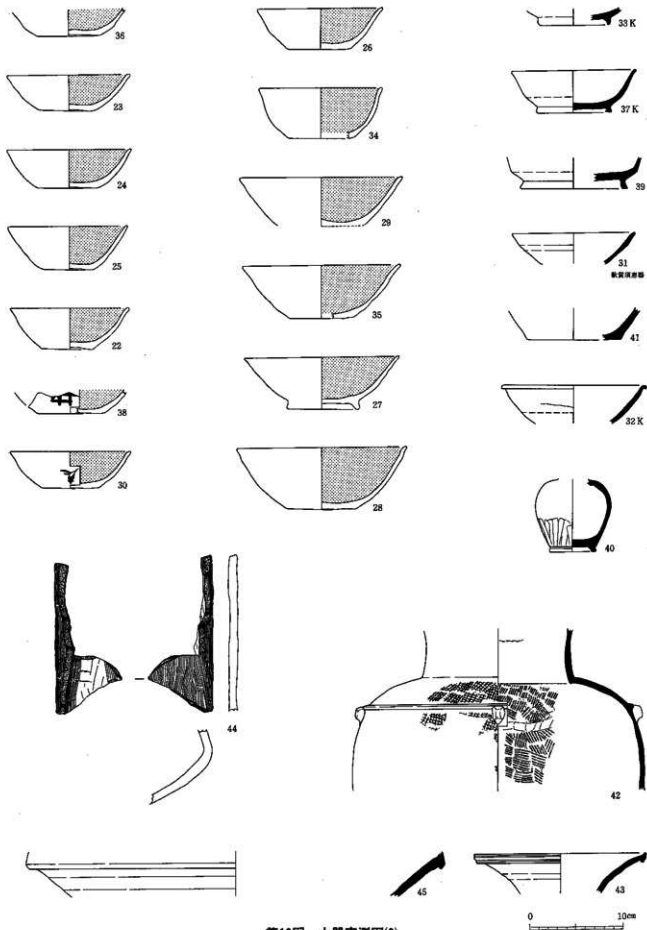


21

0 10cm

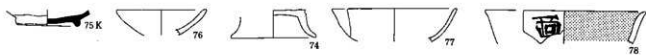
第 9 图 土器実測图(1)

2 位 (22~45)

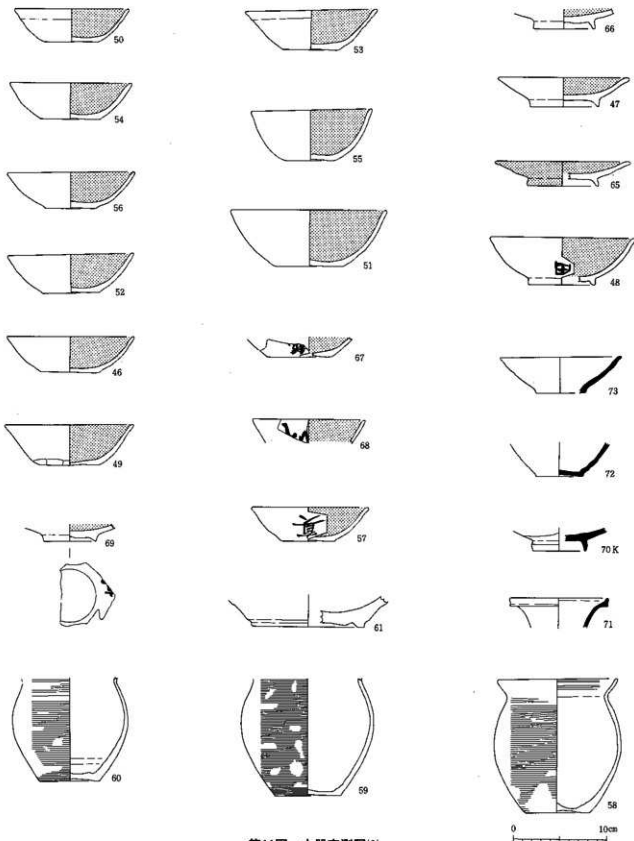


第10图 土器实测图(2)

4 位 (74~78)

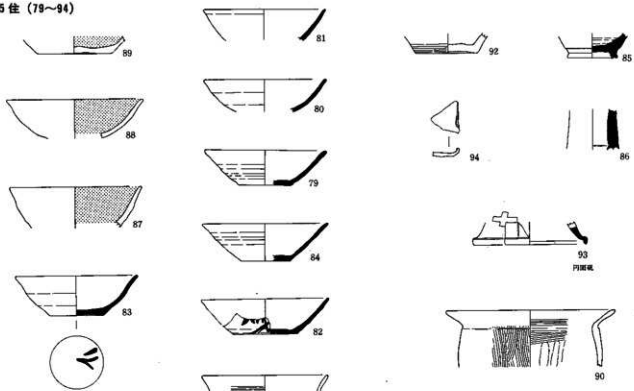


3 位 (46~61、85~73)

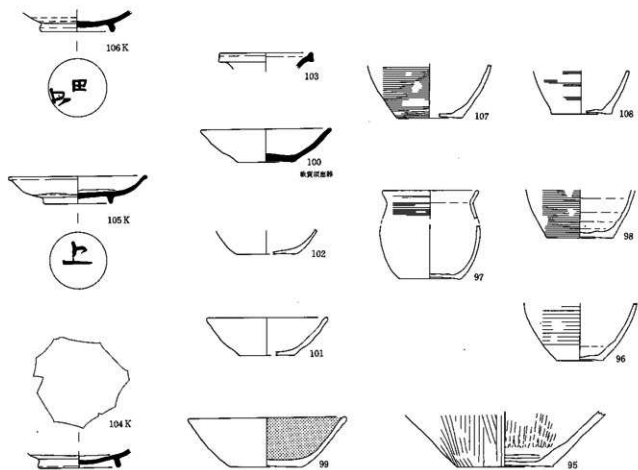


第11図 土器実測図(3)

5 位 (79~94)



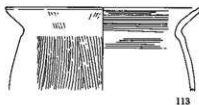
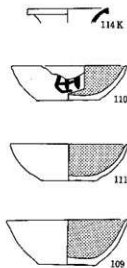
6 位 (95~108)



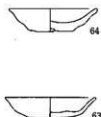
0 10cm

第12図 土器実測図(4)

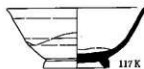
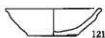
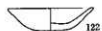
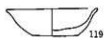
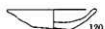
7 住 (108~114)



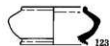
8 住 (62~64)



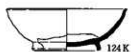
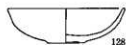
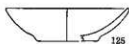
19 土 (117~122)、7 土 (116)、1 土 (115)



検出面 (123)



トレンチ (124~129)



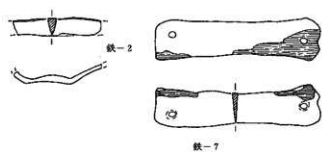
第13図 土器実測図(5)



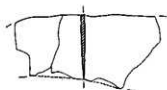
1住 (鉄-5、鉄-6、鉄-9)



2住 (鉄-1、鉄-2、鉄-7)



3住 (鉄-10)



鉄-10



鉄-1

5住 (鉄-3、鉄-8、鉄-11)

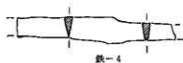


鉄-8



鉄-11

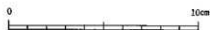
7住 (鉄-4)



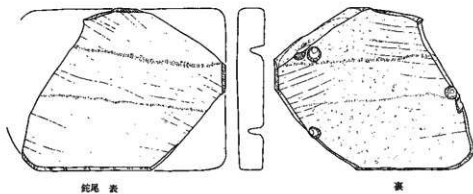
鉄-4



鉄-3



5住 石製品 (原寸大)



蛇尾表

裏

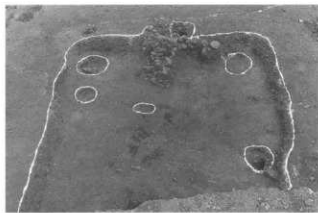
第14圖 鉄製品・石製品実測図

写 真 图 版

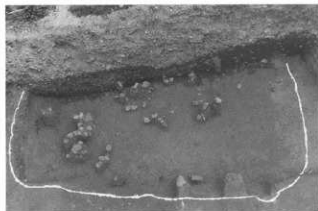
1 遺構写真他



1 住遺物出土状況 (東から)



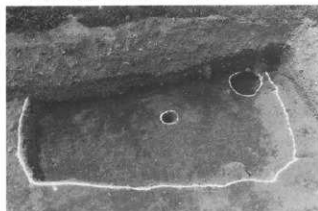
1 住 (西から)



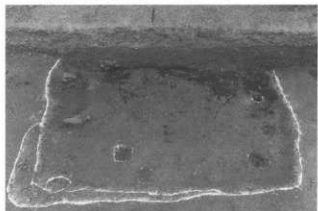
2 住遺物出土状況その1 (北から)



2 住遺物出土状況その2 (北から)



2 住 (北から)



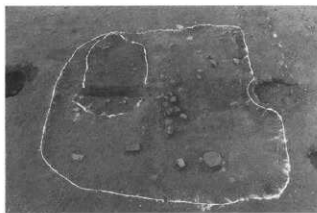
3 住 (北から)



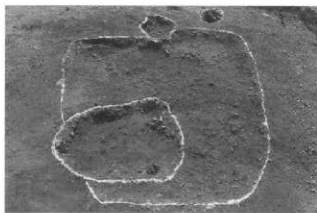
3 住遺物出土状況 (北から)



3 住墨書土器 (57) 出土状況



4住遺物出土状況(南から)



4住(西から)



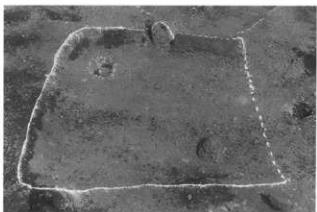
5住遺物出土状況(西から)



5住(西から)



6住遺物出土状況(西から)



6住(西から)



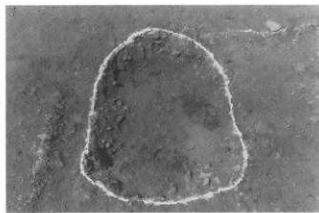
7住遺物出土状況(東から)



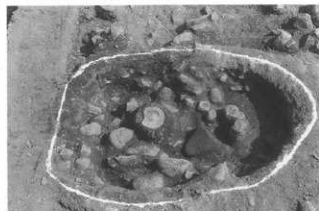
7住(北から)



19土遺物出土状況（北から）



19土（南から）



1土遺物出土状況（北から）



古墳時代面確認トレンチ



調査区全景（西から）



現地説明会（8月8日）



作業風景（測量）



記念撮影

2 平安時代の遺物



14



11



15



13



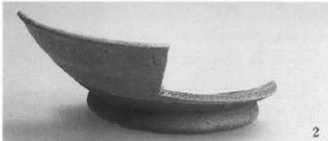
7



1



12



2



8



5



9



18

- 1 住出土遺物
- 土師器杯
- 8・9・10・11・13
- 土師器碗
- 14・15
- 土師器小型甕
- 18
- 黒色土器A杯
- 7・12
- 軟質須恵器杯
- 5
- 灰輪陶器碗
- 1・2

2 住出土遺物
 黑色土器A杯
 22·23·24·25·26
 28·30·34·35·38
 黑色土器A柄
 29



22



30



23



24



30裏



25



35



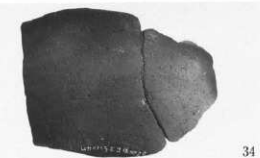
26



28



38



34



29



27



46



37



49



40



51



52



42



53



65



54



47



56

2 住出土遺物
黑色土器A類
27 灰釉陶器碗
37 須惠器長頸壺
40 須惠器四耳壺
42

3 住出土遺物
黑色土器A類
46-49-51-52-53
54-56
黑色土器A類
47
黑色土器B類B
65

3 住出土遺物
土師器小型甕
59-60
黒色土師A杯
50-55-57-67-68
黒色土師A碗
48-69



55



69



57



68



57裏



67



50



60



48



48裏



59



74



82



82裏



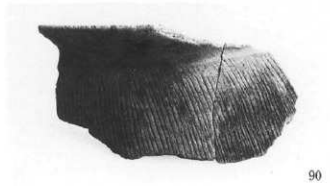
79



80



83



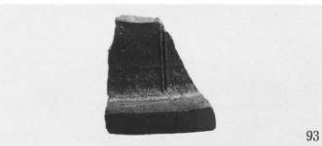
90



鈍尾表



鈍尾裏



93



97



96



98



95

4 住出土遺物
土師器盤
74

5 住出土遺物
須惠器杯
79-80-82-83
須惠器片面視
93
土師器變
90
石製品
鈍尾

6 住出土遺物
土師器小型甕
96-97-98
土師器變
95

6 住出土遺物
土師器杯
101
軟質須惠器杯
100
黑色土器A杯
99
灰陶陶器碗
104-106
灰陶陶器皿
105

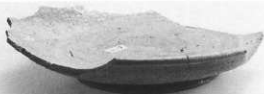
7 住出土遺物
土師器杯
109-110-111



99



100



104



105



105裏



110



110裏



104



109



106



111



112



64



63



62



115



117



114



122



120



121



119



127



125



126

7住出土遺物
土師器小型鉢
112

8住出土遺物
土師器杯
63-64
土師器碗
62

1土出土遺物
灰釉陶器段皿
115

19土出土遺物
灰釉陶器碗
117
土師器杯
118-119-120-121-
122

Aトレンチ出土遺物
土師器杯
125-127
軟質須恵郡杯
126

3 古墳時代の遺物



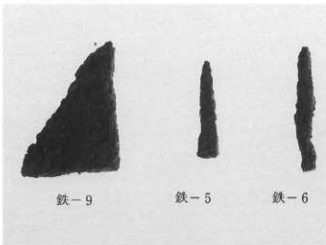
129

Eトレンチ出土遺物 台付甕



出土状況
(Eトレンチ)
→

4 金属製品 (鉄製品)

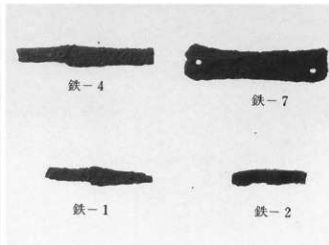


鉄-9

鉄-5

鉄-6

1住出土鉄製品 (鉄-5, 6, 9)
鉄-5, 鉄-6: 釘 鉄-9: 不明品



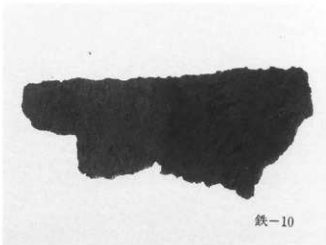
鉄-4

鉄-7

鉄-1

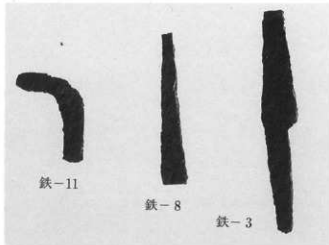
鉄-2

2住出土鉄製品 (鉄-1, 2, 7), 7住出土鉄製品 (鉄-4)
鉄-1, 2, 4: 刀子 鉄-7: 弓引鉄



鉄-10

3住出土鉄製品 (鉄-10)
鉄-10: 不明品



鉄-11

鉄-8

鉄-3

5住出土鉄製品 (鉄-3, 8, 11)
鉄-3: 刀子 鉄-8, 11: 不明品

向原遺跡緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	むかいばらにいせききんきゅうほくつちょうさほうしよくしよ							
書名	向原遺跡緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No133							
編著者名	澤柳秀利・竹内靖長・荒木 龍							
編集機関	松本市教育委員会（松本市立考古博物館）							
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号（〒390-0823 松本市大字中山3738番地1・Tel0263-86-4710）							
発行年月日	平成10年3月26日（平成9年度）							
よりかな	よりかな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
向原	長野県松本市 丸の内3丁目 1番37号	20202	333	36度 11分 29秒	137度 58分 12秒	19970717 ～19970816	490㎡	長野県松本警察署 尾川支隊センター 建設による
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
向原	集落跡	古墳 平安	— 竪穴住居址 8軒 土坑 28基 ピット 9個		土師器 土器・陶器（土師器・須恵器・灰釉陶器） 金属製品（釘・刀子・芋引鉄・不明品） 石製品（鈍尾）		平安時代前期から後期の集落跡。墨書土器・円筒硯といった文字資料を出土5住からは石製の骨飾り（鈍尾）といった特殊遺物もみられた。古墳時代の遺物包含層を確認した。	

松本市文化財調査報告

松本市向原遺跡

—緊急発掘調査報告書—

発行日 平成10年3月26日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 アサカワ印刷

